

コメント

船田 クラーセン さやか

こんにちは。そろそろ眠さが通り越したところでちょっと現実的な話に引き戻したいと思います。私は、アフリカのモザンビークというところの武力紛争を研究してきました、その意味で戦争と平和と命ということについてはここ 10 年ほど考えてきました。しかしこの論文は非常に分かりにくい。特に私の不得意とする思想と哲学の話なので、ンベンベ先生のいないところで何かコメントすることは不安で仕方がないのです。今しがたアニジャールさんは、ホロコースト 60 周年に関するドイツのポスターを見せてくださり、記憶について語ってらっしゃいます。けれども今この瞬間に、アフリカでは多くの人々が亡くなっています。戦争によって、そして貧困によって、あるいは飢餓によって、あるいは HIV／エイズによって、確実に今この一瞬のうちに何千人もの人々が死んでいます。もしかしたらそのリアリティから、私にも何か言えることがあるかもしれない。ただ、アニジャールさんの論文にあるように、共感には限界があるというのは当然でしょう。そこで私は代弁者ということではなく、

アフリカの人間でもなく、明日死ぬかもしれないという人生を生きているわけでもなく、ただそういう場所で物ごとを考えてこようとしたという経験から何か言えることがあれば、と思いました。私のコメントでは、まずこのネクロポリティクスということについて、ンベンベ氏の論文を中心に彼の主張の重要であろうと思われる点、今日の議論と関係するであろう点についてお話しし、次にンベンベ氏の議論で、今日すでに皆さんの議論に出てきた点と関係しているのですが、少し同意できないと思っている点について指摘します。そして最後に、それでもンベンベ氏のネクロポリティクスという議論は今重要ではないかと思う点について話せたらと思います。

シンポジウムのタイトルである「帝国のネクロポリティクス」という言葉についてですが、まず悩むのは「帝国とは何か？」という点です。帝国とは次の原理主義ということで、今日のパネリストの構成からアメリカが想定されているということは分かるのですが、ンベンベさんの言う「帝国」は必ずしもアメリカを指し

ているわけではなかったと思います。この部分をまずは考えたいと思います。

「帝国のネクロポリティクス」と言ってしまった瞬間に、これは日本語の問題かもしれませんが、「帝国がネクロポリティクスを独占している」というニュアンスが感じられます。しかし、ンベンベ氏の論文では、むしろ国家主権を問題にしていると考えられるのです。国家主権というものが西欧社会で作られていく過程において植民地支配が起こっていくという問題と関連してくるのですが、この点は後ほどもう少し議論していただければと思います。もう一つの問題は、この「帝国のネクロポリティクス」のタイムスパンにあると考えられます。どこを基点として考えられているのか。今日のパネリストの皆さんのお話ではそれぞれがまったく異なったタイムスパンを設定されている。ただし、どうやらポイントは、「9・11」とブッシュ大統領の任期にあると思われます。しかしンベンベの論文はこのようなタイムスパンを設定しているわけではありませんから、彼の議論のどの辺を、何のために何をターゲットとして話しかあっていくのか明確にしてはどうだろうか、ということを問題提起させていただけたらと思います。

最初に岩崎先生は、「ンベンベは絶望的

で、ファノンには反転の可能性があるが、それは時代のせいなのではないか」というお話をされていました。皆さん、ご自分の両手を眺めてみてください。この手が何者かによって切り落とされている瞬間というものを想像してみてください。そういうことがまさに今、アフリカで起こっているわけです。切り落とす人はもしかして隣人かもしれない。もしかして我が子かもしれない、もしかして…。そういう事態が起こっている。それは特にンベンベの出身地である西アフリカで起こっている。そのリアリティのなかでンベンベがネクロポリティクスを語るときに、絶望感を持つのは仕方がないことであると、私は考えています。まずは、この同時代的なリアリティをぜひ共有していただければと思います。

タイムスパンの話に入りますが、アフリカにおいて人々が大量に死んでいるという状態、お互いが殺しあっている事態、お互いが殺しあっている事態をンベンベは war machine という言葉で表していますが、これはいつから始まったのでしょうか。彼はこの点についてはあまり書いてない。これはポストコロニアルの状況というべきものなのか、どうなのか。岩崎先生は前者と示唆されています。あるいは「9・11」後の状況と考えるべきなの

か、あるいは冷戦なのではないか。そのような議論も出てきました。また、森先生のお話では、どうやらグローバリゼーションが関わっているということが示唆されました。金井先生のお話では、「帝国＝アメリカ」という想定が提示されましたが、そうなるこのような状況はある程度、アメリカのせいなのでしょうか。あるいは、ネクロポリティクスという議論を丁寧に読んでいくと、アフリカの国家主権の問題にも行き当たるかと思えます。ンベンベのネクロポリティクスがいわんとしていることは、現在のネクロポリティクス状況には、コロニアリズムの形成過程が—これは、西洋社会における国家主権の発展と形成に密接につながってくるわけですが—非常に重要な役割を果たしたということではないでしょうか。この指摘は、今でも非常に重要だと思います。

例えば、ンベンベの論文の中で、フランス革命の象徴的な出来事としてギロチンによる貴族の殺害が取り上げられています。彼らは「国家の敵」という名前で殺される。それが、革命によって主権を与えられたと考えられる市民にさえ適用されていくということで、「国家の敵＝排除してもいい」という議論が発展していく様子が垣間見られるわけです。その排

除の仕方がどんどん文明化されていき、ついにはホロコーストのようなことが起こるわけですが、これをアフリカの側で考えてみるならば、もうすこし話は違うのではないかと彼は指摘しているわけです。つまり、今まで多くの研究者が見落とした点ですが、国家の範囲というのが西欧国家の場合はコロニー、つまり植民地であるアフリカにまで及んできたという点です。植民地国家の主権が及んでいるところに昔から住んできた人たちはしかし、市民ではありません。あくまでも、ヨーロッパに住む「市民」だけが「市民」であるのです。西欧「国民」国家の網を被せられた—つまり、主権の守備範囲とされた—コロニーの昔からの住民たちは、「野蛮、敵、あるいは未開」という名前を付けられ、「国家の他者」と位置づけられました。したがって、奴隷にしてもいいし、プランテーションで働かせてもいいし、抑圧の対象になるわけです。その生と死は国家によってコントロールされることになる。この結果、コロニーの住民への抑圧は法的にも思想的にも合法化されるわけです。このように、国家主権の範囲内で行なわれるネクロポリティクス（死の政治）が、アフリカにおいては、植民者によって行われる、それに対して誰も文句が言えないというこ

とが、数百年続きました。

このことを思想家たちだけで共有しても、そこで話は終わってしまい、一般の私たちとの関係がないかのような話になってしまうのですが、もう少し考えなくてはいけない側面があります。それは、以上の過程が資本主義世界の形成過程と密接に関わってきたという点です。奴隷制の導入、あるいは奴隷貿易というのは、単にネクロポリティクスとか主権とかポリティカルな話によってのみ生み出されたものではなく、経済的利益のために西欧世界によって生み出されたという側面が強いからです。奴隷貿易、あるいは植民地化過程においてもっとも根幹をなしているのは、近代資本主義世界経済の展開であり、このような暴力をある意味で隠蔽し、時にきれいに見せるため、「未開の文明化」という言説が構築されてきたわけです。経済的利益と文明化が互いに不可欠なものとして、植民地支配は正当化され、ンベンベが述べているように、植民地化された人びとの生と死がコントロールされるという状況、生きるも死ぬも「白人主人」次第という状況が生まれていたのではないかと考えられるのです。宗教的あるいは文明的大義と資本主義経済の拡大・拡散・膨張が手と手を取り合ってこそ、コロニアリズムもインペリア

リズムも発展してきたわけで、現在のグローバル化の議論の中で抜け落ちている重要な課題だと思います。ですから今、多くの戦争は、たしかに思想的にみれば、ネクロポリティクスがいわんとすることも関係するし、西欧文明の人種主義の問題も関係してくるわけですが、日本を含めての西洋社会—いわゆる先進国側—の世界経済の支配ということとも密接に関係しているのではないかと、という点を問題提起したいと思います。その意味でンベンベの話は重要です。ただし同意できない点はこの war machine についてです。彼の議論では、子ども兵の話とか民間軍事会社の話が取り上げられ、国家主権はもう関係ないという雰囲気の話がありますが、そうではないと考えます。これは、表層的な見方でして、国家主権はアフリカの紛争において依然密接に関係しています。例えば、シエラレオネは、war machine 的な話ではよく事例として出されるわけですが、反武装勢力は隣のリベリアという国の政府と手を結んで、ダイヤモンドや木材を外に輸出して武器を購入していたわけです。自らのではないけれど、隣国政府の国家主権の論理に隠れてこれが可能となっていた現実があるのです。民間軍事会社にしても、アメリカとイギリスの退役軍人が作って

いるわけですね。アメリカの国防省がアレンジして、アフリカの諸国の政府軍をトレーニングするためにこれらの民間軍事会社は膨大な利益を出しています。あるいは、例えばルワンダ、ブルンジで起きたこと、大量虐殺を考えたときに、それはいわゆる部族対立とか民族対立とか言われていますけれども、実は国家主権、国家の権力をめぐる争いだったわけです。そのために人種主義が使われたということを見ると、グローバリゼーションによって国家が意味をなくしたから起きたというわけではなく、その反対だと言えると思います。ンベンベがネクロポリティクスと関連づけて議論した国家主権の話は、現在でも重要であると思います。グローバリゼーション下において世界中を徘徊する経済主体たちが、アフリカ諸国の各政府と密接な関係を構築していることを考えると、帝国は誰かと言ったときに、私は「アメリカなのだ」と言い切れないと思っています。そしてこの「帝国」と日本は関係ないかという、単に小泉政権が「日米同盟」を基軸としてイラクに自衛隊を派兵しているという政治的な側面だけでなく、経済的側面—そうになるとわれわれの生活とも密接に関わってくるのですが—からも、関係あるといわざるをえないと思います。それでは、

最後にしなければならない問いは、アフリカの政府あるいは政治家たちが、自国の人々に対して害を及ぼしかねないことをするのか、ということです。私たちは、すぐにアフリカの人は教育がないとか「野蛮」とかそういうふうに言いがちです。消し去ることのできない「部族主義」の問題であるとか言っていますが、この部分においてもンベンベのネクロポリティクスは使えるのではないかと私は自身は思っています。ヨーロッパ人から見た植民地支配は、これが文明化の過程であって平和的に行なわれたというイメージを未だに持っている場合が多いです。しかし現実には、非常な暴力を伴った過程でした。ほんとうに非常な暴力をとまった過程であって、非対称的な戦争という話がありましたが、これが世界レベルで最初に行なわれた事例が植民地支配の過程だったのです。このような非対称の暴力に直面したアフリカの人々は、到底抵抗を続けることができず、抵抗の機運を失うわけです。そこに入ってきたのが文明化のレトリックです。これはアフリカの人々の側にもある程度需要されてしまいます。軍事制圧の後の精神的な制圧—つまり、「精神の平定」—が、行政機構の整備と「文明化」、そして「宗教」によってなされたのです。植民地国家が征

服後まずつくった機関こそが、警察と軍隊です。これは地元のアフリカ人を主体としたものであったわけですが、それは誰のためにあるのかというと、あの同じアフリカの非被植民者たちをコントロールするために、場合によっては排除するために使われてきました。このことが非植民地化つまり脱植民地化一過程で、どうなったのでしょうか。ご存知のように60年代にアフリカは独立するわけですが、そのとき世界はまさに冷戦状況下にありました。さらには、アパルトヘイト体制下であり、植民地支配、白人支配から解放されたい人々の多くが戦争をせざるを得なかったわけです。ただし、単に冷戦、アパルトヘイト状況、あるいは武装した白人植民者の存在だけが、アフリカの人々が暴力を使って非植民地化を達成しようとした原因ではありませんでした。岩崎先生のお話の中に少し出てきましたが、ファノンに代表されるように、それまで剥奪されてきた尊厳を回復し、自らの主体性を再獲得するという目的のために暴力を使うということがなされたわけです。ファノンが暴力を肯定的に捉えた背景には、植民地支配という、絶対的暴力、構造的暴力という動かしがたい状況下にあっては、主体的な暴力でないとこれを打破することはできないという

判断があったわけです。それだけでなく、アフリカの国々の枠組みは19世紀末に引かれたラインによって成り立つことになりますから、そのばらばらな人々のあいだに統一の論理をもたらすために、暴力が肯定的に使われたのです。ある意味で中国の解放軍イメージしたわけです。

もう一度手を見て、殺される人々の側になんとか身をおいてみて一決してできるわけではなく、イメージとしてですが一、想像してください。一方には、植民地支配者側の暴力があって、それは国家主権のなかで許されている。他方には、そのような抑圧からあなたたちを解放しますよ、といいながら暴力行為が行なわれている。そのような暴力状態のなかで、アフリカに暮らす多くの人たちが生きざるを得なかった、という時代が長く続いたわけです。1994年までアパルトヘイト体制が続いた南アフリカでも、このような状況がつい最近まで続いていたわけです。このような内外状況の中で国家、あるいは国民形成をせざるをえなかった、というのがアフリカのポストコロニアルな状況であったわけです。そうするとネーション・ビルディングはどのような論理で行なわれたかということ、これがネクロポリティクスとかなり連動してくる点であり、先ほどアニジャールさんに補足

してもらった点に関わるのですが、「敵の排除」というものが、ある意味で統合と同時進行で行なわれるということになりました。冷戦構造やアパルトヘイト下で、アフリカの独立国家の政府を担った人たちは、容易に敵の排除が、国家の敵という名前においてなしえたし、それは実はコロニアリズムの遺産でもあったのです。アフリカの一般の人々は、二重の意味でネクロポリティクス状態下に置かれていたわけです。つまり、自らの政府によって、あるいはグローバル的なパワーのもとにおいて。では、冷戦が終わった後どうなったのか。これはタイムスパンの話と関わるので一点だけ補足しておきますと、今までアフリカはあまり注目されてこなかったわけなのですが、冷戦が終わったときにただ見捨てられたのですね。アフリカは見捨てられた。というのはアメリカにとっては戦略的価値を失ったという意味において、ヨーロッパ社会においては、もう敵を植民地の野蛮な人たちに求める意味はなくなったという点において。イスラムという内部の脅威が生まれたわけですから、そういう意味でアフリカは忘れ去られてしまった。一方で国家という枠組みの中で抑圧、あるいは隣人による暴力というものは続きます。じゃあ、誰がこのアフリカの一般の人たち

の生を守ることができるのか、というと、絶望的にならざるを得ない。ファノンの逆転の発想…それは現代アフリカの歴史においてどこまで「逆転」であったのか、人々の「生と死」ということを考えると、果たして「逆転」でありえたのか、他にいかなる可能性があったのか…ということを私はこれからも考えて行くしかないのだと思っています、というところで終わらせていただきます。

(ふなだ クラークン さやか・東京外国語大学)